

会報で振り返る育友会60年

昭和33年(1958年)に育友会は誕生。それと同時に会報『育友』もスタート。
全国の会員に均一に情報を伝達し、会員相互のコミュニケーションを図るために、
『育友』も今回で155号！ これまでの会報から、育友会と専修大学の歩みを振り返る。



昭和33年

記念すべき1号は、巻頭で徳永静思古初代会長が育友会発足の経緯を伝える。「今年度はまず生田に通う1年次生の父母を対象に発足いたしました、今後は2年次生以上の父母にもご参加を願い、近い将来には全学的な組織にしたい」と呼び掛けている。誌面にはそのほかに、学生の様子として生田運動会の記事が掲載され、「育友会からも菓子寄贈」とある。



1号 1958.7

台風22号により生田キャンパスも甚大な被害を受け、一時断水になったことを伝えている。自宅または下宿が崩壊した学生もあり、「育友会としても見舞金を出した」とある。学生支援の姿勢は育友会設立当初から一貫している。



2号 1958.10



台風二十二号のつめあと

育友会より罹災学生へ



4号 1959.10

昭和34年

この年から始まった地方懇談会（現支部懇談会）を特集。まずは郡山、広島、福岡、鹿児島島の4カ所で開催。各会場で父母から出た質問をQ & A形式で掲載しているが、「4年で卒業するのは難しいのか」「学生運動について心配はないか」「就職に成績は影響あるか」「運動選手は単位が取れるか」など、その内容は今に通じるものもあれば、時代を反映したものも。



13号 1963.3

昭和38年

就職関連の記事に「就職に関してご父母の関心は高い」とある。学生も当時から就職活動には熱心だったようで、「学内面接、講習会、模擬試験は大入満員」と記されている。



↑神田キャンパスで開かれた育友会支部長会の様子



32号 1970.7

昭和45年

モノクロではあるがこの頃から会報に写真が増える。当時の全国支部長会や学生の様子が見て取れる。



学生生活の第二の顔、クラブ活動にも彼等は真摯に取り組む。

←学生たちが真剣にクラブ活動に取り組んでいる

↑入学試験の合格発表の様子も掲載。ネットで合格を見る人が多くなった現在、これだけ多くの人が一斉に掲示板を見つめる光景はなくなった

昭和50、51年

授業などキャンパスでの学生や、地方懇談会の様子を写真で伝えている。昭和52年には育友会の会員数は1万9,000人を超え、各地で支部活動の連携が強化された。



43号 1975.11



44号 1976.7



昭和56年

54号から巻頭部分のみカラー印刷に。54号では生田・神田キャンパスの施設や百年記念碑、55号では地方懇談会など育友会活動の様子をカラー写真で伝えている。



55号 1981.12

54号 1981.6

昭和60、61年

遠くで暮らす我が子の生活、気になるのが親心。「専大生の食生活」(62号)、「下宿生活は何色？」(64号)、「専大生はカッコいいか」(65号)など学生たちの衣食住について特集記事が組まれる。

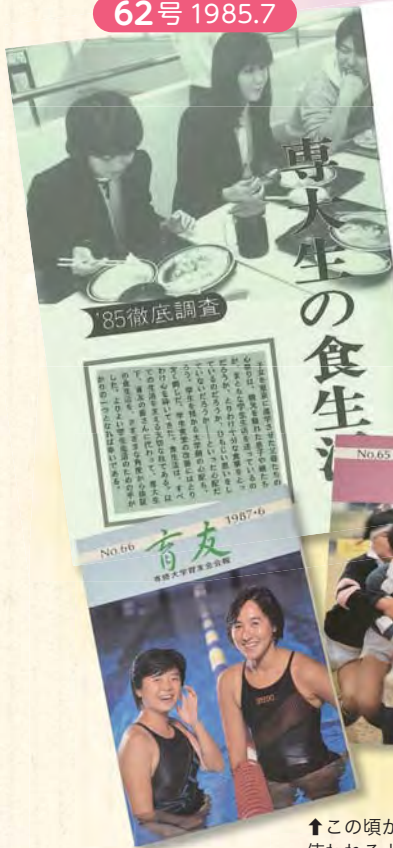
62号 1985.7



64号 1986.7



65号 1986.12



↑第3回育友会主催「留学生を励ます会」(現校友会・育友会主催「留学生を囲む会」)の様子を伝える(65号)

↑この頃から表紙に学生の写真が使われるようになった



68号 1988.6

昭和63年

昭和から平成へと移る時代の節目に、育友会は創立30周年を迎えた。この号では育友会創立30周年記念祝賀会の様子を伝えている。



平成10年 88号 1998.6

入学式やクラブ勧誘などイキイキとした学生の姿を写真で伝える。当時学生だった彼らは今…。あれから20年、大学生の子供がいてもおかしくはない。



平成20年

育友会創立50周年を迎え、表紙には直木賞作家の志茂田景樹先生が登場。創立50周年記念事業として刊行した専修大学創立者を描いた小説『蒼翼の獅子たち』の作者だ。誌面には志茂田先生と学生との座談会のほか、記念式典・祝賀会の様子などを掲載。



115号 2008.11



119号 2009.10

平成21年

育友会創立50周年の翌年には、専修大学が創立130年を迎えた。専修大学発祥の地である銀座から神田キャンパスまでの記念パレードなど、大々的に行われた祝典の様子を伝える。



平成30年

平成最後の秋号を発行。育友会は創立60周年を迎え、新たな時代の扉を開いて進む。

155号 2018.10